

戦略的な留学生交流の推進に関する検討会（第1回）議事要旨

1. 日時

令和4年11月11日（金）13時00分から15時00分までの間

2. 場所

文部科学省16F4会議室

3. 議事概要

事務局より資料3から4の内容について説明があった後、委員による意見交換がおこなわれた。委員による発言の概要は以下のとおり。

○日本語教育機関から大学等への進学が非常に多い。日本語教育機関に入り一定の学習をして、入試を経て入学してくるので、日本語教育機関と大学とが連携をしていくための施策は非常に大事だと思うが、現実はまだ不十分である。

○外国人留学生の出口保証があるからこそ大学の受入れのブランディングができる。大学を卒業してから定着ができることを奨励している国は世界を見ても多くない。日本の特徴としてブランディングしていくべき。

○英語で学位が取れるプログラムで入ってきた留学生層に対する施策が不十分。留学生獲得のため英語のプログラムを増やすという施策がおこなわれてきた一方で、入ってきた留学生たちが定着しないという現状もある。

○様々な施策が国から打ち出されたときに大学側でそれを理解して、学生にアドバイスできる人材が不足している。

○日本人学生自身が留学を通して得たと感じるスキルと企業側が採用時に求めているスキルとの間にギャップがある。その原因には、語学留学目的の短期留学が多いということがあると思う。実際に留学のプログラムで何をさせるのか、どういうアウトカムを求めてどんなプログラムにできているかというデザインの問題もある。

○オンラインによる学習、共修、国際教育と、実際に渡航する留学を一緒にして効果を補填していくという考え方が必要。

○英語だけで学位取得できるプログラムなど、受け皿ができれば、日本に行きたいヨーロッパの学生はそれなりにより、母国に帰っても日本とのつながりを大事にしたいと行ったり来たりする人が多い。必ずしも留学生が日本国内に定着しなくても日本とのつながりを持つ高度人材というのはある程度できるのではないかと。

○特殊な雇用慣習のあるドメスティックな日本企業に無理やり留学生を押し込むというのはあまり賛成できない。外国の高度人材をどう活用するか、どう日本社会で活躍する場を提供するかというのは、大学というよりは企業の、あるいは社会全体の問題。

○1か月ほどの短期の留学生を増やしたいのか、または長期の留学生を増やしたいのかにより、目的も効果も手段も違うので、整理すべき。

○留学生交流の意義・目的について、歴史的には平和の実現、国際理解の促進としての位置づけがされており、これは非常に重要な部分であるため引き続きそういった政策的な方向性は必要。一方で、政策目的として国際公益的なことだけではなくて、頭脳獲得、高度人材の獲得といった国益的なところを考えていく必要がある。

○日本人留学生の派遣については、かつて近代化のための先端知識の獲得という目的があった。日本が先進国になってからはグローバル人材育成という目的があったが、もう一度先端技術を学びに行く必要がある状況でもある。

○オンライン留学の位置付けを検討する必要がある。

○国費留学生の大使館推薦と大学推薦の役割分担、JICA（国際協力機構）の事業との連携・役割分担などを整理する必要がある。

○留学生受入れ促進プログラムについては、戦略的に使っていくことが必要。

○日本としてどのような社会を目指していくかというコンセプトを決める必要がある。ダイバーシティー・エクイティ&インクルージョン（DEI）やSDGsなど、国として目指すべき社会の姿によって、外国人留学生の受入れの意義が変わってくる。

○若い人がなかなか海外に目を向けないことを非常に危惧しており、日本にとって大きな問題。高等教育からではなく、早い時期から子供たちにもっと海外に目を向ける教育に産官学全体で取り組むべき。

○外国人留学生にとって、大学は居心地よく勉強できる環境があるが、生活面では日本はまだ必ずしも住みやすいところにはなっていない。インフラ整備をダイバーシティーという観点で、社会全体で考えなければいけない。

○キャンパスの国際化、カリキュラムの国際化といったインターナショナルリゼーション・アット・ホーム（内にある国際化）という視点が重要。意味のある交流を通して多様性を尊重しながら互いの理解を深めることを目的として共修を推進すべき。離れたキャンパスをオンラインでつないでその活動もできるようになっているということも注視すべき。

○JASSO（日本学生支援機構）の支援制度も諸外国の経済状況の変化や物価の状況などを踏まえアップデートすべき。国内外の動向、全体的な施策を見ながら戦略的に、効果の高い政策を再構築する時期である。

○文部科学省からの奨学金をブランド化していく必要がある。奨学金の同窓生間の絆ができ、自分の前後にもらった人たちの活躍が可視化できることで、相互理解や平和の構築にも資するものになっていく。同窓生たちは基金に寄附をすることから、寄附の循環というものをつくり出すことを視野に入れることも重要。

○留学生の受入れ目的は学部、博士課程前期・修士課程、博士課程後期で大きく異なる。日本人学生の博士課程後期進学の減少傾向が止まらないため留学生を増やさないといけないという考え方は本末転倒。留学生の存在が日本人学生に与える影響を活用できるような

取組があると良い。

○日本に留学した学生が英語だけで日本の大学を過ごすのはもったいない。日本語もある程度分かるようになってもらうことが、たとえ日本国内の就職につながらなかったとしても、将来的によい影響があると思うし、もちろん国内就職につながる可能性も格段に増える。